

書道部の仲間たち

松浦 俊博

毎年七月と十二月の第一週に大学の書道部同窓会がある。七月は若手四学年の集まりで私の学年は真ん中、十二月は私の学年が一番下で三学年上まで。岡山や広島から、再会を楽しみに出てくる先輩もいる。

若手の集まりは、上野公園にある「韻松亭」いんしょうていで昼食というスタイルが定着してきた。住重のN氏夫人が探してくれた場所で、ベランダから不忍池を眺められ、そこで集合写真も撮れる。和食コース飲み物付きで会費四千円は優しい。

書道部に入部する者は、既にある程度のレベルに達した人は二割に満たず、残りは人並以下で、「入部すれば、少しはましな字を書けるのではないか」との幻想を持つ、いわば重症患者たちであった。卒業後も筆を持つのは一握りで、彼らからの年賀状は作品として大事に保管している。

最初のころは真面目に練習した。毎年、藤沢の遊行寺などの寺で合宿をし、文化祭に出す作品を書いた。一年生の合宿では杜甫の「春望」を書いてみた。全紙に四十字の五言律詩を楷書で書くのだが、小一時間集中する。途中で失敗しても書き続ける。何度も繰り返すうちに失敗が少なくなってくる。あの頃の根気は、今はとてもない。

今年の七月は、会場近くの東京博物館東洋館の「中国の書跡」展示を先に見てから昼食となった。高齢者は入場料無料。見慣れた王羲之おうぎしや顔真卿がんしんけいの書体には引かれるが、勿論こんな字を書けるわけがない。「どんな紙にどんな筆で書いたのだろう。墨つきはどこか」などと低レベルの想像を膨らませながら一時間余り過ぎた。

昼食会ではやはり健康維持の苦労話も多かったが、皆それなりに元気だった。乳がん専門医もまだ現役で、とんでもない患者への対応の笑い話をしていた。絵を描く人も何人か居り、その中に画家の息子がいて、毎年素晴らしい作品の年賀状をくれる。旧古河邸での個展に誘ってくれた。コロナの時期に参観者のいない古河邸二階の窓越し景色を、部屋を汚さないように手漉き和紙にパステルで描いたそうだ。自由に楽しんでいる様子が伝わり、元気をもらった。